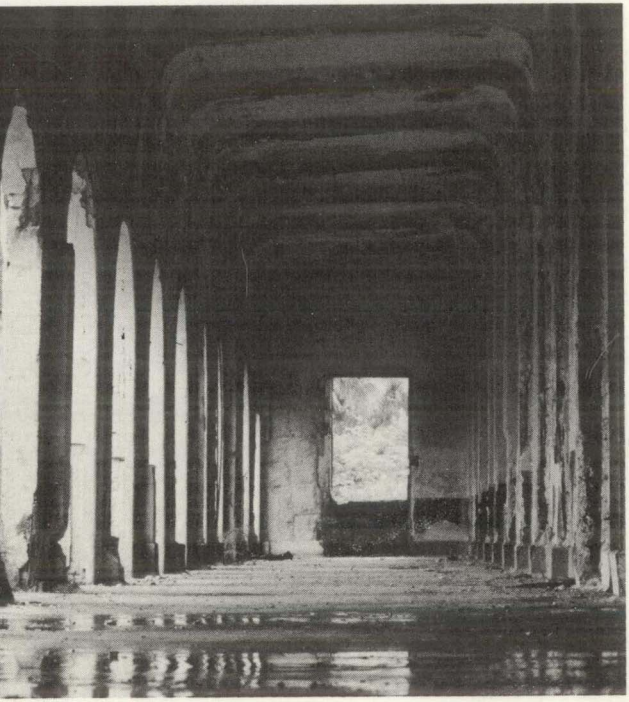


世界が語りかける

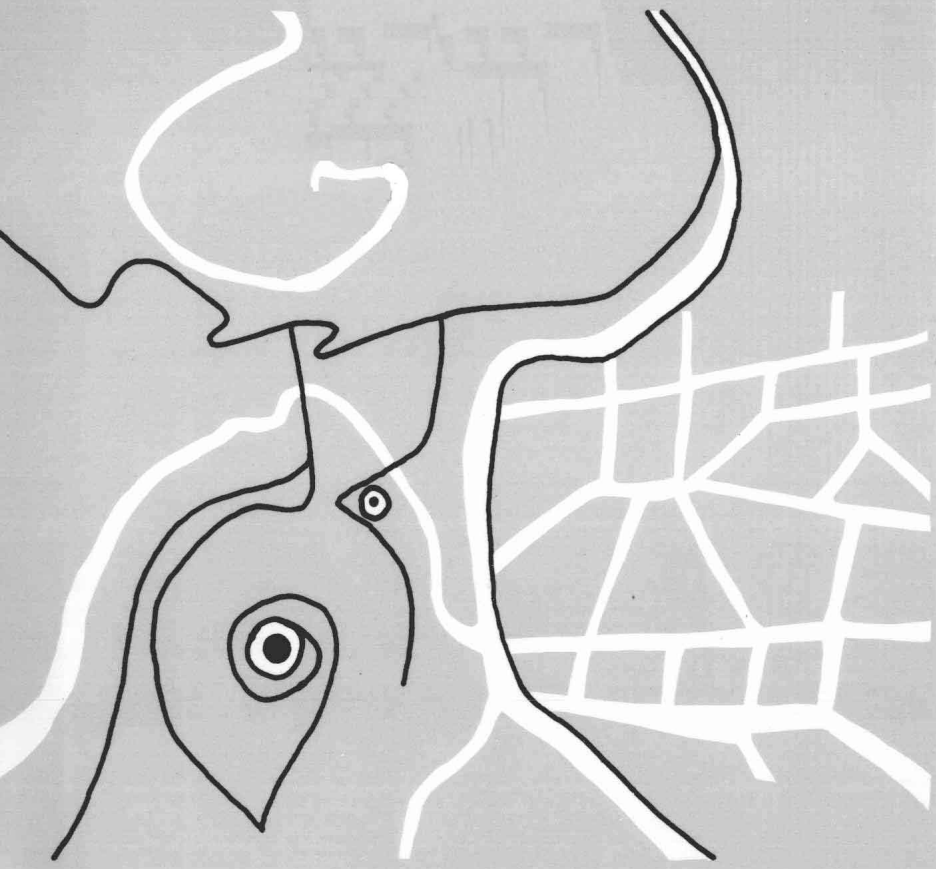
小田実

写真・三留理男

1977–1979

世界が語りかける

小田 実　　写真・三留理男



世界が語りかける

一九七九年 七 月一〇日第一刷発行
一九七九年 八 月二五日第二刷発行

定 価 九八〇円

著 者 小田 実

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社
一〇一 東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話 出版部 (〇三) 二三〇―六三六一
販売部 (〇三) 二三八―二七八一

印刷所 凸版印刷株式会社

© M. ODA, Printed in Japan, 1979
0095-772205-3041
検印廃止。落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

世界が語りかける

目次

I

90日間世界を翔ぶ

1 「タガン・タガン」のなかの「ブロード・ウェイ」旅はそこから始まった 8

2 「世界のマト」の島で何が起っていたか？ 20

3 ニューヨークは歩くところだ 32

4 メキシコへタコスを食いに行こう 44

5 革命的「マッチースモ」の男たち 54

6 「インディオ」が「インディオ」に会う 64

7 「先進国」メキシコからアメリカ合州国へ帰る 76

8 レンタカー屋で考えたこと 88

9 「少数者」から「多数者」を見よう 98

10 「宿場町」ラスベガスから「古都」オライビへ 110

11 ミナランサおばあさんのことを君は知っているかあるいは人間には二つの生き方がある 122

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

12 原子爆弾とさまざまな「わたしのアメリカ」 134
13 「自治州」プエルトリコを通って
アメリカ合州国を立ち去る 160
14 瓦レキの現場で 174
15 「知力」でたたかう 186
16 サハラ砂漠でのきわめて政治的な対話 196
17 「第三世界」から日本へ 216

II **太平洋が語る南の島々** 227

III **ほっつき歩くことから** 255

ＡＤ・ブックデザイン／玄順恵
カバー写真／浅井康弘

世界が語りかける 1977 — 1979

I

90日間世界を翔ぶ

テニヤンの滑走路　ここから原爆搭載のB29が日本に向って飛び立った

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1.「タガン・タガン」のなかの
「ブロード・ウェイ」
旅はそこから始まった。

テニヤン島に原爆搭載の記念碑があった

アメリカ合州国の黒人作家アレックス・ヘイリーの書いた「根っ子」という作品がはやっている（「ルーツ」は「根っ子」だ。日本での訳本やテレビ映画は、どうして「根っ子」といわないのだろう。レッキとした日本語を使わないのだろう。レッキとした日本語を使って何かわるいことがあるのか。ここらあたり、日本の「ルーツ」、いや、「根っ子」のなさだ）。

アメリカ合州国という白人社会に生まれ、育って来たひとりの黒人である自分のよって来たるゆえん――それが「根っ子」というものの本質だが、その本質を探る、頭と手足という人間にとってもっとも基本になる道具を使って掘り起す。その作業のすばらしさが、本には作業の苦しさとともによく出ていた。

ただ、「根っ子」は一本ではない。アレックス・ヘイリーの立派な作品に文句をつけるわけではない。それははじめにことわっておきたいが、「根っ子」探しが少しばかり流行しているそうだから、そう言っておきたい。一本だと考えると、ことはたちまちくだらぬ「系図」探しになる。

「系図」というのはふしぎなものだ。世界各国、おおむね、父方だけでさかのぼって行く。さかのぼって行くうちに、わが祖先は何トカ天皇だということになる。何トカ村の大地主だということになる。ここらあたりを支配していた大名になる。大名の参謀の家老になる。その家老に仕えたサムライになる。

そういうことを自慢するのが、若いのなかにまでいる。

ついでのことに言うと、それを祖先から伝わった先祖伝来の家屋敷、土地といっしょに自慢するのがいる。アホウだ。こういうのには、要するに、それはそいつが人殺し、無法者、大泥棒、サギ師の子孫であるということを示しているだけのことではないか。

理由？――そんなものは自分で考えたまえ。ひとつだけ言っておこう。人間は元来平等であり、土地は万人のものであった（マルクス、キリスト、釈尊、福沢諭吉みんな言っている）。だから、他人を家来にして、天皇になったり、大名になったりする。あるいは、土地を勝手にひとり占めして、この土地はオレのものだと宣言して大地主になる。こういうことすべては人を殺めたり、腕ずくで人の持ち物を奪ったり、あるいは、ごまかしてチョロまかしたりしないとできないことだ。つまり、「家柄」の家系、もうそれだけで人殺し、大泥棒のたぐいの家系だということになるだろう。先祖は、つまり、その連中だった。

「系図」のふしぎの第一は、「系図」がたいていそういう恥さらしの事実を人まえにさらけ出すためにつくられることだが（その証拠に、初代百姓タゴ作。――二代目百姓タゴ作――三代目百姓タゴ作……レンメンとつづいて現在に至るという「系図」は私は寡聞にして見たことがない）、第二のふしぎは、さっき言いかけたが、あまた、あちこちに伸びて行くはずの「根っ子」を父方の一本を残してみんな断ち切ってつくられていることだ。

父方の一本だけに収斂させて考えて行けば、たしかに「系図」は次第に先細りして、それこそ先祖は天皇、大地主、大名、家老、サムライなどの人殺し、大泥棒のたぐいになるというまことに絶望的なことになるかも知れないが、母方の一本をそこにつけ加えるだけで、たとえば、そこから、わが「家系」は世界に名だたる名無しのゴンベエ族にひろがって行くという希望的なことがらになる。世界がなんとなく明るくなる。

そんなふうにさかのぼっているうちに、わが家系に南方はるか、トンガ王国あたりの王様、いや、名無しのゴンベエ族の血がまじっているということがわかるかも知れないし、近くに住む朝鮮人金氏と案外親戚だということになる。

金氏のほうだって、さかのぼって行けば、わが先祖、済州島の王様だったというつまらぬことではなく、朝鮮半島から茫として大陸にひろがり、シルクロードをさかのぼってペルシアにまで至るという雄大無比なる名無しのゴンベエ族の一大集団につき当ることになるかも知れない。

だから、私はこのつまらぬこと多きこの世界にまだ希望をもつのだ。そこまで考えをはせれば、世界の前途はまだまだ明るいし、老い先まだまだたのしいと思うのだ。

老い先？——人間だれだって年をとる。キミだってそうだ。赤ん坊にくらべると、あとの年月、すべて老い先だ。老い先短いのだから、大会社に入って何んとか安定した生活を送って、きれいなヨメさんをもらって、クルマの一台も持って——というようなくだらぬことを考えるな。シルクロードのはてで、キミの親類がクルマなどというくだらぬものをもたないで、ゆったりとくらしているのかも知れないのだ。

そのキミの親類にして私の親類（世界はみんな兄弟、はらから——というようなことを言っていたのは、さかんにテレビで大金かけて言っているのは誰だったか。私は大金をかけないで、ここで言う）である世界名無しゴンベエ族よ、団結せよ、しかして、神よ、もしオマエさんがいるなら、彼らを祝福せよ。

それで、私はキミと私の親類を訪れるために、旅に出かけることにする。どこへ。世界へ。どうしてか。「根っ子」が世界にあるから。キミの、私の、誰でもの「根っ子」がそこにある。

それは事実であるとともに、思考の「根っ子」でもある。さっきから言っているのはそうしたことだ。

で、私はまず、サイパン島へ行った。いや、ことをもう少し正確にしておこう。サイパン島とそのとなりのテニヤン島へ行った。

いや、もう一度、いや、を言うが、そのまえに、私は大阪へ行き、広島と長崎に行った。

まず、大阪の街のどまん中に立っていた。丈の高い立派なビルディングが立っている。にぎやかな商店街がある。アメリカ合州国直輸入のドーナツ屋のまえに若い男女がむらがっている。フランス第五共和国直輸入の洋服を売る「ブティック」とか称する店のまえで、イタリア共和国製の服を着てフランス第五共和国デザイン、大韓民国製造のスカーフを首にまいた女の子が「ミリタリ・ルック」とかいう名前のアメリカ合州国陸軍のヤトイ兵ないしカイライ軍みたいな服を着た若い男と話をしている。

これらすべてが現実にたしかにある。そうした存在をもつものとしてある。

しかし、ほんとうに実在しているのか。それらすべては実在ではなく虚構でないのか。そう思ったとたんに、それらの存在は架空のものとしてポッカリと消えている。

いちめんに焼け跡が見える。それがひろがる。突然、そちらが現実のものとなる。ときどき、街を歩いていて、私はそんな感覚を実感としてもつ。思考はここで二手に分かれる。

眼前の丈の高いビルディングを実在として見るか、そこから思考を始めるか。それとも、そちらを虚構のものとしてとらえて、丈の高いビルディングも何もなかった、いちめんの赤茶けた面積のほうを実在としてそこから思考を始めるのか。

「焼け跡派」の郷愁とまちがわないで欲しい。それほどのくだらぬ郷愁にふけるほど私は年老いていないし、説教ぐせもない。「焼け跡」をふりまわして説教する中年男のからだのうちからはかえって焼け跡が無くなってしまっているのだろう。それよりは、タダの赤茶けた面積だ。そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com